

【講演】 持続可能な地域文化とボランティアを見つめて
～ コロナ禍の中でどう変わった ～

ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室

主任研究員 大澤 寅雄

皆さんこんにちは、ただいまご紹介にあずかりました大澤寅雄と申します。

実は私、このふくおか文化ボランティアフォーラムは 3 回目の出演、参加をさせていただいています。最初に参加させていただいたのが 2013 年でした。今、壁に掲げてあるパネルを見て「あ、そうだった、2013 年っていうのは僕の糸島に移住した年」を思い出しました。その後 2018 年にまた登壇させていただき、今回 3 回目の登壇となります。

先ほどの伊佐先生の話で私の紹介までしていただいて、改めて自分の自己紹介をするのもなんですけども、私は、ニッセイ基礎研究所という東京にある所謂シンクタンク、調査や研究をもっぱらにしている会社に在籍しています。2013 年に会社とのかかわり方を契約、委託契約という形に切り替えさせていただきました。それである種、個人事業主というか、フリーランスみたいなものです。でも会社にいけば机も一応あります。東京の市谷というところのオフィスには自分の机とパソコンがありますけれども、基本的には福岡県糸島市に生活し始めてもう 8 年です。そこでどんな仕事をしているかという、観光庁、自治体の文化政策に関する調査研究、アートマネジメントに関する調査、それからホールや劇場の事業評価ということも仕事にしております。今日は、私の仕事そのものの話よりは文化ボランティアについて考えたいと思います。こういう機会をいただくと新たにいろいろと勉強させていただくことになり本当にありがたいです。

その話に入る前に、先ほど伊佐先生からいろいろ糸島のことも触れていただきましたが、少し自己紹介がてら、自分がやっていることをご紹介します。

これはまず、糸島芸農という小さな芸術祭です。

国際芸術祭を一応名乗っていますが、私はそこの実行委員メンバーをやっております。

10 月にその芸術祭は終わりましたが、こんな感じで楽しくアーティストを呼んだりトークのイベントをやったり、主には人形芝居もやったり、参加アーティストの多くは美術系のアーティストですが、中にはパフォーマンスをやったりとか、映像作品の上映会をやったりとか、そんな芸術祭を実行委員メンバーとして 2 年に 1 回やっています。

糸島で面白いのは、これも私の友達ですが、糸島シェアハウスというのをやっている友人がいて、彼らも移住者なんですね。この風景、糸島らしい風景です。

私が立って居る所は海に面していて、すぐ後ろに山がそびえている、僕もですが、この棚田の稲刈りとかを体験させてくれたりします。田んぼを彼らが管理して移住者とか糸島に住んでない人にも田植えの体験とか稲刈り等をさせてくれます。

僕は個人ではなくて、次に紹介するある小さな会社の友人たちと一緒にその棚田を借りて

おいしいお米を作っています。つい昨日、初めて収穫したお米を玄米で食べました。すごくおいしかったです。

友人がやっている糸島シェアハウス、その私が棚田を借りているのはこの「こっから」という会社です。何をやっている会社かよくわかりませんが、ラジオ番組をやったり、写真もやっています。これは僕の近所の海ですが、こんな普通の家を買い上げてここをオフィスにしています。空き家だったところを買い上げてここをオフィスにして、そのオフィスの一階を会員になったメンバーは自由に使っていいよ、という仕組みをつくって、僕も会員にやらせてもらっています。

ここに庭があったりね、イベントをやったり、一階はほんと素敵な場所なんです。僕は時々、ここに行って大音量で音楽をかけながら仕事したりしています。

何をやっている会社かという、もともとこの会社のメンバーも全員移住者ですけど、東京でリクルートという会社がありますね、大きな会社です。リクルートに勤めていた人ですが、自分たちで会社を興して企業の社員研修のプログラム、人材育成のプログラム等の開発をやったりしています。僕より年下、40代かな、男6人がやっている会社です。

それから最近糸島に、「顔が見える本屋さん」というのがオープンしました。ここも移住者二人が初めたお店で、この女性は僕の近所のマンションに住んでいる方です。古本屋ですけど、面白い本屋なんです。もともとこれも空き店舗でしたが、その空き店舗の壁に本棚を作ったものです。

私も、本棚一枿をオーナーになってくれと言われて、月3000円でオーナーになって、自分が売りたい本、読まなくなった古本とかを売っています。

これは東京の吉祥寺でこういうブックマンション方式という本屋さんをやっているところがあって、それを真似してやり始めたものです。そんなユニークな本屋さん、私もそのオーナーの一人ですが、100人ぐらいオーナーがいて、それで今この前原商店街、シャッター商店街だったところがちょっと元気になってきているっていう状況です。

なんか糸島自慢ですみませんね。でも糸島も住んでみるといろいろありますよ。移住者はこうやって元気な人が多いですが、古くから糸島に住んでいる人たちとの関係はどうだったとかね、いろいろ気になることもあるでしょう。

それはまた別の機会に喋るとして、伊佐先生がおっしゃる通り、こういう移住者がそこを選ぶということが、一つはクリエイティブな人材が集まってくるキッカケになっています。そのクリエイティブな人材がまたクリエイティブな人を呼んでくる、というそういう現象が今起きているなあ、と思います。

ここからもう一回本題に戻ります。

3年前に私がこの場でお話をさせていただいたときに、何をしゃべったかなあとって、もう一回見直しました。その時にこんな話から始めました。

これ2018年、今からちょうど3年くらい前の新聞記事で、東京五輪パラリンピックの大会ボランティア、これが8万人を達成したという報道が2018年の11月に載っていました。

同じ時期に、これ同じ日の別の新聞で、「やりがい搾取だ」という批判もあります、というニュース、まだコロナのコの字も聞いてなかった時期ですよ、ボランティアってこうやってやりがいを搾取するっていう風な見方もあるんですよ、という話を皆さんに聞いていただいたところです。

ここから3年たった10月29日、先月ちょうど一か月ぐらい前にこんなニュースが流れました。

「東京五輪パラリンピックに参加のボランティアの70%以上の方は、参加理由を達成できた」と。参加した理由をアンケートで尋ねたところ、参加した動機を「自分は達成できたと思う」という方が7割ぐらい、一定の満足度が得られる結果となった、というニュースが流れていました。あれだけの大きな世界的な大会では、ボランティア無しには成立しなかったと断言できると思いますが、そこで関わったボランティアの7割の方が満足だったというようなニュアンスの調査結果です。

さらに、大事なことが書かれていますね。「大会の終結が活動の終わりにならないようにしたい」これは大事ですね。

そういう意味ではこの「とびうめの会」という、この文化ボランティアの会は、国文祭がきっかけで出来たネットワークです。その国文祭が終わってからもこうやって続けているということ自体、やはりこのオリンピックもそうなんです、何かしらできた繋がりをどうやって続けさせるかっていうことは非常に大きなテーマになっていると思います。

もう一つ、これはオリンピックと関係ない話ですが、沖縄で今年11月25日、つい最近のニュースにこんなのを見つけました。

「ボランティアガイド活動存続の危機を訴える」と。

長年沖縄の平和学習に携わってきたボランティアガイドさんが、その団体がコロナの影響で活動存続の危機に陥っていると。つまり修学旅行を中心とした戦跡巡りや戦争体験者の講話といった活動がコロナの影響で修学旅行生が激減して、収入も以前の3%以下。

3%以下というのは0になったって考えていいぐらいすごい数字ですね。

それぐらい「ボランティアの存続がコロナの影響で危機に陥っている」というニュースを目の当たりにしました。

今日、この話をまず最初に紹介したうえで、どうやってこの先のボランティア、地域文化ボランティアを続けていけばいいんだろ、という話をみんなで考えてみたいと思います。

まずそもそもコロナ禍以前にボランティアってどういう傾向だったんだろうね、ということ振り返ってみます。

これも実はあの2018年の時に紹介したある調査の結果を最新の調査に合わせて紹介することで、傾向をもう一回振り返りたいと思います。

内閣府がやっている市民の社会貢献に関する実態調査、内閣府ですから国がやっていて、全国各地で、20歳以上の男女が調査対象になっているそうです。これの平成25年、平成

28年、令和元年度の調査結果、この縦にその2013年2016年2019年を比べられるような横棒グラフになっています。3年ずつの推移が見てわかると思います。

ボランティア活動の経験をしたことがある、したことがないという二つの質問に、したことがあるが2013年は35%あった。分かりますか。2011年の東日本大震災があった2年後ということは非常に大きいと思うんですね。東日本大震災があったことでボランティアの機運が非常に高まったし、実際ボランティアに行ってきた、ボランティアになんらかの形でかかわったという方もその2年後にはこれ程多かった。

調査年度が2013年度なので「参加したことがある」「したことがない」ということを聞いているのがたぶん1年前を振り返っていると思うわけで、翌年とは、震災の翌年を聞いていると思っていいと思います。

そこからすると突然2016年度に減るわけですよ。

やはり震災があった、あれだけ大きな震災があったということが人々の行動を駆り立てた。でもそれから時間がたつとやはり落ち着いていって、2016年、2019年と17%ぐらい。

この差は非常に大きいですね。大きいと同時にこれは年代別の、これは前回紹介しませんが、年代別の集計があって、これ2013年ですが、震災の2年後の調査報告では「ボランティアをしたことがある」「したことがない」について20歳代から60歳代まで年代によって切り取って、60歳代は32.9%、だから3人にひとりぐらいはしたことがあるよと答えていました。

一番若い20歳代でいうと、38.1%がしたことあると。だからどちらかといえば、若い人の方がボランティア活動をしたことがあると2013年では答えています。

ところがですね、令和元年度、直近の調査でこれが、結構明確に20歳代が10.1%、で70歳以上になると24.2%っていうボランティア活動の経験の有無が明らかに高齢層が経験があると答えている傾向があって、逆にいえば若年層は無経験の傾向が強い。

これは結構はっきり出たなど、僕もこのデータを見たときに、つまり70歳以上24.2%ってことは、4人に一人はボランティア活動やっている、と答えているが20歳代に至っては10人に一人ですからね。9人はやったことがないと答えている。これはちょっとどう受け止めればいいのか、というところなんです。まあもちろん年代によって自由に使える時間も変わってきますからこれ自体を取り上げて、これはけしからんみたいな話ではないわけですが。

ボランティア活動に参加した分野っていうのをこれは文化ボランティアに限らずですね、様々な分野のボランティア活動を聞いています。

2013年2016年2019年度を横に並べていますけども、ちょうど真ん中ぐらいに見えるのが芸術文化スポーツという分野で、2013年度は22.0%、とデコボコしてますね。

パッと見た感じ、真ん中のこのオレンジ色ピンク色で囲ったのがデコボコしています。

右上がりに書いているのは地域安全、それから災害救助支援です。

面白いなと思ったのは、地域の安全にしても災害救助支援にしても何らかの形で安全とか

安心とか地域の不安にどう対処するかみたいな部分でのボランティア活動っていうのは、この2013年から2019年に至る6年間では上がってきています。

ほかの分野は右下がりの分野もあります。

例えば保健医療福祉とかは右下がりに落ちてきていますね。

この理由は僕もよく分かりませんが、芸術文化スポーツはそういう意味では年によってデコボコしているというのが分かります。

ボランティアの参加理由、3回の調査、すべての分野にわたる調査ではありませんが、2015年以外では「社会の役に立ちたいと思ったから」というのが一番大きい理由でした。

2015年は自己啓発や自らの成長につながると考えた為というのが一番だったんですね。

まるっきり僕なんかと違います。

僕の参加動機は、例えばさっき紹介した糸島芸農もボランティアですが、社会の役に立ちたいなんてちっとも思いませんね。自分が面白いと思う、ある意味では自己啓発に近いかな、という感じですけども。多くの人、特に2019年度直近の調査結果をみると、社会の役に立ちたいと思っているのが理由の過半数を占めていますね。

これは大きなあとと思いました。

また参加動機で興味深いのは「職場の取り組みの一環として」というのが2013年度35.9%あることです。これはやはり東日本大震災のボランティアは職場が積極的に誘導した、というのがきつとあるんだろうなと感じており、これも面白い結果です。

一方参加の妨げになる要因はなんだろうというところですが、これは相変わらずです。これ前回紹介した時も同じでした。参加する時間がないと、忙しいからできない。

そりゃそうだなあ、だから20歳代とか30歳代の若い層は忙しいんだ、僕も50歳超えましたが、少しずつそうやって年取ってくると少し自由に使える時間も増えてくるということはあるでしょう。

今紹介したのはコロナ禍以前のデータから見ています。

新型コロナでボランティアはどうなったのかということ、実際のところそんなデータはまだ、なかなか見当たりません。

後ほど紹介しますが、まずその私たちの生活がどんな風に変化したのか、というところから紹介したいと思います。

ニッセイ基礎研究所で調査している「新型コロナによる暮らしの変化に関する調査」というのがインターネットでも見られます。20歳から74歳の男女を調査対象にしています。1回から5回調査をやっていますが、後ほど調査の推移を見ていただきますが、この調査ではいろんな設問がありますが、今回紹介したいところをピックアップしておきます。

「新型コロナで生活に不安を感じる部分ってどんなところですか」と不安を感じていることを尋ねています。

一つ一つ、例えば今見ていただいているのは感染に関わる不安、健康状態が悪化するんじゃないかそれが非常に不安だと答えている人、やや不安と答えている人、どちらともい

えない、あまり不安ではない、全く不安ではない、など 4 段階、あと該当しないを含めると 5 段階で答えてもらっているのが、上の方から 2020 年 6 月それから 2020 年 12 月、2021 年 7 月、2021 年の 9 月と 4 回に分けてこんな風が変わってきていますよ、というのが横棒グラフで紹介しています。

非常に不安、やや不安という濃い緑、薄い緑あたりを注目していただくと、これもデコボコしていますね。増え続けているとか減り続けているという感じじゃなくて、概ね 6 割、5 割から 6 割ぐらいの人がやはり健康状態の悪化が怖いよ、と当然ですよ。だからみなさんマスクをしているんだと思います。

先ほどの伊佐先生の経済の問題、これを皆さん生活者の意識として、この先、日本経済が悪化して企業業績や雇用環境が悪化するんじゃないか、これ怖いなと思っている人がどの位いるのかなと思うと、これ 2020 年の 6 月からすると少しずつ不安数は減少傾向にありますね。かといってなくなったわけではなく、やはり過半の割合です。

50%を超える人は非常に不安、またはやや不安というところになっています。ただ最初にコロナが蔓延し始めたときほどは不安の傾向というのは少しずつ減少しているということもこのデータからはわかるところです。

面白いというか、今回着目したのは、ボランティアに密接に関係があると思ったのが、人間関係の不安です。友人や知人との関係に距離が出来るのではないか、これを不安と感じる層が徐々に増えてきています。これはまだまだ経済の不安とか健康の不安とかに比べたら少ない割合ですが、このじわじわ増えている不安の増加傾向は、この先も続くんじゃないか、というのが私の予測ですね。

まだまだコロナ、しかも新しい変異株が発見されたとか、そのためにイベントが中止になる、延期になる、自粛を求められる、そうなったときに友人や知人との関係に距離が出来るのではないか、という風な不安は徐々に広がっているんじゃないかと思います。

さらにもう一つ、人間関係不安、新たな出会いが減るっていう項目があって、これも不安層が増加傾向にあります。

「新たな出会いが減るっていうのが不安なのか」というと、素朴にこれ違うのかな、と考えますが、別に今の知り合い同士が会っていれば不安ではないという気もします。でもこれも大事かも、と思ったりします。

新しい人との出会いがないっていうことは、不安とっていいかどうかわからないですけど、いかんせん少しずつ増加傾向にあるという結果になっています。

つまり健康とか経済とか、いろんな不安はあるでしょうが、徐々にこう不安が増加しているのは人間関係に係る部分が少し出てきたなあ、ということがニッセイ基礎研究所の調査で分かりました。

これもコロナウイルスの影響下の生活意識、あと行動の変化を調査した内閣府の調査ですが、これは逆にコロナがあって新しいこと、新しい何かに挑戦したり取り組んだりしましたか、という調査がありました。

まずその新しいことへの挑戦への取り組みが何なのかというと、今までやれなかった日常生活に関わることに新たに取り組んだ、例えば家の修繕などと。家の修繕、具体的にリフォームしたとか、部屋の模様替えをしたとか、という感じかもしれないですけども、日常生活に関わることで新たに取り組んだっていう回答が他の種類より多くありました。

それ以外には教育学習、ビジネス関係の勉強、あとオンラインでの発信、オンラインでの交流、本格的な趣味やビジネスに新たに挑戦するとか、まずこういう種類があります。こうした新しいことへの挑戦や取り組みに全体としては半分以上の人はコロナがあったことでなんか新しいことをやろうと、しかもそれが面白いのが世代ごとにこれだけ違うんだということが分かります。

10歳代 70%、20歳代 30歳代 40歳代、50歳代以上になると 41.8%。僕も 50歳以上ですから、なんか新しいことやれって言われても、もうこの年になって新しいこと億劫だなとか、もう今のままでいいよ、と思いますかね。

やはり 10歳代とか 20歳代とかは、コロナの中で「せっかくだからなんか新しいことやってみよう」と思うんでしょうね。

これは世代を超えて選んでもらった項目の中で、日常生活に関わることで今までやれなかったことに取り組んだとか、教育や学習、新しい分野技術、語学などに取り組んだ、ビジネス関係の勉強に取り組んだ、オンラインでの発信やオンラインでの交流に挑戦した、などと続いています。だから世代の差というのはやはり大きいなあと、コロナによってその世代が、どの世代でコロナに直面しているか、逆に言うと若い人はこのコロナに直面した時に、受ける影響もやはり大きいだらうなと思います。

学生の話とかを、友人の大学で教えている人から聞くと、「ちょっとかわいそうだよ」という風に話します。だって、学校にいけなかったりオンラインで授業やったりで他の人との出会いにすごく飢えているんですって。出会いに飢えているっていう話を聞く一方で、オンラインでもいいんじゃない、という風に割り切る若い子もいるそうです。

それを考えるとコロナ禍って、相当若い子に対しては影響が大きいだらうなと思います。

もう一つ紹介したい調査があって、やっぱり新型コロナ禍の中での生活行動調査ですが、国交省がやっている調査です。

国交省ですから移動とかに関する調査ですが、コロナの流行前と緊急事態宣言発令後の令和 2 年 8 月ですからもう 1 年前ですけど、その 3 つを比べたときに、もっとも頻繁に訪れた場所の割合を聞いています。

日用品の買い物をする時に、「自宅の周辺でやりましたか」「それとも勤務地」「学校の周辺」「自宅から離れた都心部・中心市街地」「自宅から離れた郊外」かを聞いています。

しかも、自宅周辺から都心部や郊外と答えている人から、近くで済ませているのか、遠くまで行くのかということ、行動の種類別に最も頻繁に訪れている場所はどこですかという聞き方をしています。ちょっとわかりにくいので先に説明進めながら丁寧にやります。

これは日用品の買い物ですから、自宅の周辺で済ませている。コロナの流行前も緊急事態宣言中も調査時点でも、これはまあそんなに変わらないわけですけども、例えばこれが、外食はどうですかといったら、こんなに違うんです。

まずコロナの流行前、外食はそんなに頻繁にいかないからと答えた人が 24%ですが、緊急事態宣言中になるとそれが 73%、緊急事態宣言中がおそらく明けたぐらいのこの令和 2 年 8 月の調査時点では 51%になっています。コロナの流行前から外食の行動がこれだけぐらついています。

僕が注目しているのはこの外食における『自宅周辺』という行動です。外食、一番左の濃い緑ですね、コロナの流行前 23%が外食で自宅周辺を訪れています。緊急事態宣言中は 13%に落ちました。それが明けたあとは 20%に回復していますね。水色のところは外食で、コロナ流行前では 25%は自宅から離れた都心・中心市街地を訪れている。例えば福岡県の郊外にいる人が博多・天神まで訪れて外食にくるという人は 25%位いましたが、緊急事態宣言中はそれが 5%に落ち、それが明けたら 10%にしか回復していない。コロナの流行前に比べたら都心まで行って、中心市街地まで行って食事に行くっていうことは全然回復してないわけですね。自宅周辺は割と回復しているのに。ここが重要な点です。

もう一つ紹介したいのは、映画鑑賞、コンサート、スポーツジムなどの趣味娯楽っていう文化的な活動です。

オレンジの外出ですが、コロナ流行前は 39%いました。しかし、緊急事態宣言中は 85%の方が外出を控えています。宣言が明けたそのあとは 70%です。その残り 3 割はどこにしているかというところ、やっぱり一番多いのは自宅周辺なんです。

コロナ流行前は自宅から離れた都心・中心市街地まで映画を見に行ったりコンサートにいったりスポーツジムに行ったりしていた。それがコロナ感染を挟んで自宅に近いところで見たり聞いたりするということに少しシフトしているんです。ここは結構コロナ前後で変わっているんじゃないかという気がします。

そこで新型コロナによるボランティアの変化ですが、これは丁寧に説明するよりも皆さんおうちに帰って、是非これを見てください。

名古屋市の社会福祉協議会が 13 団体で構成するボランティア活動の促進、「共同会議 2020」というそういうチームを作ってコロナに負けないボランティア市民活動の取り組みという本を作っています。

これ凄くよく出来た本で、PDF でダウンロードできるので是非見てください。

こんなページがあって、いろんな事例を紹介する中でこんな活動をコロナ禍の中でやっていますよ、というのを整理した絵ですけども、見えにくいと思います。

例えば左上の方から紹介すると、遠くにいても参加できるリモートの良さを活かす、という事例があったり、SNS で販売を促進するとか、会議や打ち合わせだけじゃないオンラインの活用とか、リアルなイベントがいつも通りできなくても動画を活用して開催するとか、

様々な事例の中でエッセンスをここにまとめたページがあったんですけども、なるほどな、コロナの中でこういう形で活動をしているんだというのがよくわかります。

どれどれじゃあ1番の事例を見てみよう、7番の事例を見てみようっていう形で参照できる冊子になっています。すごく勉強になります。

それともう一つは東京ボランティア市民活動センターがやはり新型コロナの中でのボランティア、市民活動参考事例集というのをWEBサイトで公開しました。これも開いていくといろんな事例があります。

文化だけではなくて、例えば居場所づくりみたいなボランティアもありますね。子供の居場所とか、そんな事例も沢山ある中で、ヒントをまとめている箇条書きの項目があります。なるほど、まず電話やメールで状況を確認するとか、いろんなツールで繋がりを保つとか、様々な手段で情報を発信するとか、感染予防に配慮した居場所で開催するユニークな取り組みやスタッフやボランティアへの配慮など、こうやってヒントをまとめています。これもぜひ眺めてみてください。

ここで一つ一つの事例を紹介するよりは、ケーススタディもありますので、僕の方からは、こうした新型コロナ禍のボランティアで何が変化しているんだろう、ということを整理したものをお話しします。

まず、大げさじゃなくてボランティア同士で安否を確認するっていうことはあるなど。「元気になっている？」とか、「しばらく会ってないけどどう？」というような事を電話とかで連絡を取り合う、安否確認というと大げさかもしれないですが、会ってないとわからないですからね。そのことが繋がりを再構築する、ということになると思います。

次は如何^{いかん}ともし難い、つながる手段がどんどんオンライン化になってくるわけですね。私自身もそうですが、最初は混乱^{いざな}しました。ZOOMの使い方からして、マイクのミュートとミュート解除の例では、ミュートしていると思ったら全部マイク入りっぱなしで家庭の情報が駄々洩れになってしまったこととかね、それはもう技術を習得する必要性に迫られるわけです。

オンラインで可能性が広がる部分も多々あるわけですがね。

特に、オンラインを使うことで地理的な制約は本当になくなります。

僕は8年前からリモートワークをしています、これだけみんなが当たり前前にオンラインでつながれると、先程の伊佐先生の学会の話じゃないですけども、オンラインのイベントに参加するのに糸島市内とか福岡県内とか関係ないですからね。それが一般に公開されているものであれば、海外からでも参加できるわけです。そういう意味ではすごく可能性は広がってきます。

でも一方で排除している危険性もあるわけです。

オンライン使えない人、端的に言うとインターネットが苦手だわとか、私スマホ持っていないとか、そういう人を知らない間に排除しているということもありますね。

これは前に述べたコロナ禍での人間関係の不安もそうですが、この先課題として大きく持

ち上がってくるんじゃないかと心配します。

特にボランティアとしてこの人間関係の不安や課題にどう向き合えばいいのか、ボランティアの内部もそうですけども、ボランティア活動が何かしら社会に役立っていると言った時に、その人間関係の不安や課題にどう向き合うかっていうことが大事になってくるんじゃないでしょうか。

それこそ文化ボランティアはそこに向き合うべきじゃないか、というのが私の考えです。もう一つはどのように地域、地域って漠然とした言葉ですけど、自宅周辺とどう向き合うかということは、今考えた方がいいと思います。

僕はコロナになってから移動の制限が出来て、コロナ以前は月一回ぐらい、東京に打ち合わせに行っていました、それがなくなって、出ちゃいけないっていう事態になって自宅にずっといるわけです。それでも散歩はしたり近所の人と出会ったりすると、やはりそこでいかに暮らしやすい土地にするかっていうことは自分の問題でもあるし、そういう人たちと共にこの地域をより良くしたいといつも考えています。

それが AMAZON で買い物をするから商店街がシャッター商店街だって関係ないわ、とかいう発想だったら本屋は生まれません。さきほど言った糸島の顔が見える本屋さんが出来たことで私はどれだけ付き合いが増えたか、本当に付き合いが増えました。

本棚のオーナーどうして自分の本棚とそこで出会ったオーナーさんと、あなたこういう本読むんですねっていう交流が生まれるんですね。

これ AMAZON じゃ絶対生まれません。自宅周辺とどう向き合うかっていうこと、これは文化ボランティアの非常に大きな問題だと僕は思っています。

最後にこの持続可能な地域文化とボランティアということについてお話します。

僕は前回もこの話をしたと思います。僕が外でこういう話をするときには「文化を生態系として眺めています」という話をするんですが、生態系っていうのは、木とか草とか、植物っていうのは光合成をすることで有機物を生み出すわけですね。炭水化物であったり、ビタミンであったり、たんぱく質であったり、アミノ酸であったり、もともとは水、**H2O**とか炭素とかナトリウムとか無機物であったものを植物が光合成することで有機物に変えてくれる。それを私たち人間も含めて虫や動物が消費する、消費者間での消費もあります。死んだり排せつ物があったりすると、それが土に還ってバクテリアや菌、きのこがもう一回無機物に変えてくれるわけですね。それがグルグルグルグル無機物や有機物、無機物、有機物って循環しながら命を受け繋いできているわけです。

僕、「心」っていうのはもう有機物だと思うんです。

これ実際に僕は、14日間の隔離生活というのを経験しました。

海外に家族が昨年まで住んでいて、会いに行行って帰ってきた時に14日間の隔離を2回経験しています。

この隔離生活で食べることはできる、寝ることはできる、オンラインだから仕事も出来るんですけど、ほんと外に出ちゃいけないっていうことに従わなきゃいけないし、そうするとほんと牢獄牢屋に入れられているみたいな、心がどんと萎えていくんですね。そう考えると普段私たちは、料理を作って食べる、僕は料理が好きなので料理作るのは楽しいわけですが、作るということがもう楽しいことと改めて感じます。

そこで考える訳です。「なんで14日間も隔離されなきゃいけないんだろうなあ」と。もちろん楽しむ、音楽聞いて楽しむとか、本読んで楽しむとか、誰かと共感することが心の有機的なものなんですね。あなたも悲しい、私も悲しい、あなたが悲しんでいるのは私も悲しいし、あなたが楽しんでいるのを見るのは私も楽しい、というのが人間らしい生活。だからもう心という有機物をいかにして持続させていくのか、ということが文化で、その生態系に求められています。

こうして生物の中で生産者・消費者・第一消費者・第二消費者・第三消費者・分解者と循環していくように、文化施設や文化施策があることが例えばアーティストというクリエイティブな人材を呼び寄せて、そこに観客や参加者が集まり、それが教育や福祉やまちづくりに繋がって、行政や議会や市民に、「ああ文化って大事だな、やっぱり心の有機物、文化がないと駄目なんだな」というふうに思うことが、また文化施設や文化施策を元気にする、その循環になると思うわけです。

考えてみればこの図をもう一回、今日喋ろうと思った時に、この循環の基盤は「ボランティア」なんですね。考えてみたらやっぱりそうだと。

文化施設だけがあっても役にたちません。例えばそこにアーティストさんをアテンドして、楽屋に案内して、その後アーティストが舞台にでて観客に歌を歌ったりする。その前にはお客さんを誘導したり、チラシを配ったりする仕事もちろんありますが、それらを支えるボランティアが必要だったりする。

その観客や参加者として楽しんだ人が、その街の中でにぎわいを生んでいくときにもボランティアが必要だったり、様々なこの一人一人の何らかの自己実現がこの文化の循環を支えていると、改めてこの絵を見ながら思いました。

持続可能性っていうのはエコロジーの言葉ですけども、生物的なシステムはその多様性と生産性を期限無く継続できる能力で、人間活動、特に文明の利器を用いた活動が将来にわたって持続できるかどうかを表す概念です。

これは文化も含めた持続可能性という問題なんですね。最近SDGsという言葉もだいぶ普及していますが、SDGsの17の目標に文化は出てきませんよね。

これはほんとに僕は悔しくてね、文化も物凄く持続可能性、社会の持続可能性に大きな役割を果たしていると私は思います。それを皆さんは支えているし、今このコロナっていう状況は生態系の言葉でいうと攪乱、これ「かくらん」って読むのかなと思ったら「こうらん」って読むらしいんですね。

攪乱とは、例えば台風とか山火事とか、雪崩とか自然界に起こること、それはまあ破壊

的な状況だけど、実はそれって次の世代の個体が利用できる生息場所を生み出すことでもあるわけです。だからコロナって確実にこの攪乱が起きているといえます。

今文化、特に文化芸術では攪乱ってのはすごく大きな、まあ破壊的など言ってもいいかもしれないですけど、だからこそ新しい参加者がそこにいるかもしれない。

それは再生と攪乱のプロセスで生態系の多様性が生まれるというチャンスでもあるということをお伝えしたいと思います。

皆さん今日一緒に文化ボランティアを通じて「社会の役に立つ」という参加動機に応えられるだろうか、若い世代をボランティアにどう誘えばいいのだろうか、コロナ禍でどんな新しい挑戦や取り組みが可能だろうか、地域文化の持続可能性にとって、なぜその活動が必要なんだろうかっていう事を一緒に考えたいと思いました。

以上です。ご清聴ありがとうございました。